

庄内協同ファームだより

No.130 2009年7月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com



ミュージシャンであるグッチさんと一緒に

今年の春、「田植えをしてみたい」と都会からウッドベースのミュージシャンであるグッチさん(カサをかぶっている人です)がふらりとやってきた。田植えの補助や苗運びなどで週間ひつちりやってもらった。「なれない農作業で大変だったけど、ふだん見れない空や朝のピンとした空気や夕焼け、そしてごはんがうまかった、また来ます。」と帰っていった。ご苦労サンでした。助かりました。

実家が専業農家の妻と結婚したのを機に農家になり8年。自分は農家の生まれでもなく、興味があつた訳でもなく、たんぼや畑のことは何にもわからなかつたので、とにかくむしゃらにやってきた。春から秋までびっしり農作業。稲刈りが終わった後には庄内協同ファームでのもち加工。ここ数年は米の検査員にもなり、さらに地域では消防団や生産組合、ソフトボールのチームにも入り、気がつくとなつかり「農家のあんなや」となつていた…。

考えてもわからないし、全然進まないので行動あるのみ。やるしかない！で農作業やもちつきをやつてきて、当然たくさん失敗したり悩んだり、その中でもがいてつかんだ経験が自分のすべて。そして8年がこれからの自分の基準になつていくのだと思う。振り返つてみると、「とりあえずやつてみる」「わからなかつた」「これが自分の長所だつたのかも。年々自分に任せられる仕事は増えているが、同じように経験値も増えていくので、よりスムーズに、無理せず働けている気がする。さらに良いことに、農家仕事がちよつと楽しくなつてきているという。楽しいことは頑張れるし、続けていける。

これから自分がしなければならぬことは、じないでいくこと」。いつか来る親世代の引退、世代交代のときうまくバトンをもらえるように。そして、バトンをつまぐ渡してあげられるように。

グッチさんが東京に帰る前日、体験学習に来た中学生と家族の前でささやかな演奏会を開き、見たこともないような大きなウッドベースの音色に義妹の三味線が合わさつて、なんとも素敵な夜を過ごすことが出来た。

自分がすべてを持っているわけではないし、相手もまたしかり。でも、自分ができることをみんなが持ち寄り集めてくれば、何かが生まれ、それは楽しく、また人がそこに集まつてくるのだと思う。まわりを生かして自分も生かされる、そういう仕事を農業を通してこれからもチャレンジしていきたいと思つていこう。



高橋直之

生産者として有機認証に思うこと

生産者 富樫 俊 悦

毎年有機認証の監査の時期は忙しい。田植えがやっと終わり鴨を放したり、除草機を押ししたり枝豆の播種 定植 管理作業が隙間無くピシリなのだ。そのため、育苗ハウスの中は田植えした後のまま一切片付けられることも無く醜態をさらしている。ビニールハウスの前を通る度、作業場や資材保管所の前を通る度に「片付けなければ!」と思うだけで結局そのままになっている。 そんな時に有機認証の監査は、外の作業を休んででも片付け掃除をしなければならない強力な圧力となり面倒だが有り難い存在となっている。こんな事でもないと片付けられない我が家の体質は改善事項に入れられそうである。

自分の場合、有機認証を受けているのは水稲だけなので書類の仕事はそんなに難しいことは無いし、実際の作業も自分次第なので出きるようにやれば良い。難しいのは隣接圃場の人楽しい雰囲気協力してくれるような友好関係を築くことだ。自分に不利益が及ぶような事を隣人に強制されれば誰でも反発する。年老いた農家や日中働きに出ている兼業農家が農薬のヘリ散布を利用する気持ちは良くわかるので、嫌な顔ひとつせずに薬剤で対応してくれる圃場主には感謝の気持ちが素直に湧いてくる。 自分が今まで受けたAFAS監査では無かったが、他の認証団体では隣接圃場主に「隣の圃場に農薬の飛散をさせません」との誓約書を書かせ提出させる団体があるとも聞いた。こんな事をやられたら恵比須顔で協力してくれていた人でも般若になるかもしれない。 周りにも笑顔でいてもらえる有機農業を続けていきたい。

NPO日本オーガニック検査員協会 理事長 丸山 豊
(JAS有機農産物 有機農産物加工食品認定検査員・講師)

有機栽培をされている皆様のご苦勞にいつも敬意を表します。私たち検査員の仕事は、毎年1回、認定基準通りの栽培管理がなされているかどうかを見るために訪問します。管理のためには、グループでルールを決めて文書化し、そのとおり実行することが重要です。

管理のルールは認定時に確立しているので、認定後に生産者の皆さんが具体的にやることは、「許可された資材を使用すること」「周辺からの汚染の影響を受けないようほ場確認をすること」「必要な情報を決められたルールで記録につけること」の3つに集約されるものと思います。

これらは慣れてしまえば決して難しいものではありませんし、皆さんよく実行されておられると思います。悩ましいのは周辺環境の把握でしょうか。毎年周辺環境は変わりますので、汚染のリスクも変わります。それよりも「おいしい有機農産物を安定的に生産する」栽培技術のほうがたいへんご苦勞だろうと思います。

有機のJAS規格が2000年にできて9年目、規格は定着してきましたので、今後おおきな変更はないと考えます。今年は経過措置(紙マルチやシーダーテープ等)の期限が来るので一部改訂されます。また平成23年には、5年に1度の改正規格が発行される予定です。

有機認証を支える第三者機関による監査

有機JAS法の制定により、有機農産物を販売するには、第三者認証機関による認証が必要になりました。

第三者認証機関とは、農水省より登録認定機関として認可された登録機関の事で、庄内協同ファームでは、株式会社アフアス認証センターから認証を受けております。

有機農産物の生産農家や加工食品の製造業者を認定事業者と云い、書類審査や実地監査を受けて合格後、認定事業者自らが生産、製造過程の記録などに基づいて農産物や食品を格付けし、有機JASマークを貼付して商品を提供する事になります。(ちなみに、有機JASマークは太陽、雲、植物の三つをイメージしたものだそうです)

今年の監査は、6月10日~12日延べ三日間に渡り庄内協同ファームの各農家生産者を廻り書類審査や、実地監査を行いました。

監査は有機圃場や、生産設備(倉庫) 書類の監査などですが、具体的な監査項目を大別すると以下の項目になります。

- 有機圃場として申請した圃場一覧との照合
(栽培方法、栽培する作目、栽培する面積)
圃場及び周辺の状況
(有機圃場と認識出来る看板が設置されているか、近隣の圃場との関係)
使用資材などの確認
(種子、育苗土、育苗場所、育苗や本田に使用する肥料や有機資材など)



圃場の現地監査

有機圃場として認識できるか、近隣の圃場農家の方々にも分かるように、看板等を設置します。



圃場の現地監査

近隣の圃場農家との関係や実際の隣接環境などを見て回ります。



使用資材の監査

実際に使用する肥料や、有機の資材の現物確認と保管場所の確認。それから使用後の残数量なども確認されます。



作業施設の監査

収穫後の置き場、保管場所、出荷する時の状況等予め登録認定機関に対して申請した時と変わりは無いが、汚染などの心配は無いが確認しています。

作業施設の状況確認

(使用機器、収穫、保管、出荷の一連の各施設、汚染や混入防止などの状況、他に使用する農薬の管理場所、保管庫の状況)

各種記録簿の確認

(使用資材の購入伝票、証明書、JASマークの枚数管理表、使用機器の一覧表、実際の作業状況の記録簿これには清掃作業なども含まれます)

監査は書類の準備等、苦勞も多いのですが、農産物の履歴について、多くの人から理解いただく為にはどうしても避けて通ることはできません。監査する側も、される側も「安心な食べもの」を提供するための努力は続きます。



事前申請した一覧表との照合

有機圃場として申請した圃場一覧表と栽培方法、栽培する作目、栽培する圃場の面積が一致しているか確認しています。



有機JASマークの使用状況のチェック

有機JASマークの使用に関しては、実際の使用枚数の管理も必要になりますので、その管理表のチェックを行っているところです。



購入資材の伝票との照合

使用する資材、肥料などの購入量と実際使用した量をチェックし、妥当性があるかなど確認しています。

ペンリレ 徒然草

農の雇用事業研修生
大川 秀

4月1日から協同ファームの研修生として、新しい一年がスタートしました。これまでの繁忙期での作業と同じ餅の製造作業、組合員の方の下での農業実習、そして今の時期は麦茶の焙煎と、新しいことを指導していただきながら日々努力をし、少ない人数で効率よく良い製品を作ることを楽しみを感じる毎日です。

今まで私は「仕事として、物を造る」という経験がほとんどありませんでした。ただ言われたことを機械的にこなしていくだけ…そういうイメージが強かったからです。一昨年初めてアルバイトとして餅の製造に携わり、その考えはまったく別なものになりました。組合員の方々、職員の皆さん、各リーダーの熱意や温かさ「にふれ」、またこの人達と一緒に仕事したい！この中で自分も何か役に立ちたい！と思ったのです。この気持ちが今日の研修生という結果に繋がってとても嬉しく思



ています。家族からも、「前と表情が全然違う。楽しそうなの。」と言われるくらいなので、自分でも気付かないうちに参りてきたのだと思います。

その家族達に自分が製造に携わった餅などを持って帰ると、まず真っ先に子供達が駆け寄ります。「何持ってきたの？お餅持ってきたの？食べたい！」その言葉を聞くと本当に嬉しくなり、顔がにやけます。又、4月に参加させていただきます。田んぼの生き物調査アシスタント講習会でも、協同ファームさんの麦茶の大ファンなんですよ！と、言ってお下さる方もいらっしゃいました。

原料の生産からすべてに自分が携わっているわけではありませんが、自分がしている作業の大切さを、そういう周りの人の方から声で再認識することができました。「この人達と一緒に仕事がしたい！」という気持ちの先にあつたのは、自分が造った物を一人でも多くの人にのびのびと食べてもらいたいという気持ちでした。

今の自分は、仕事を正確に

農業三知識

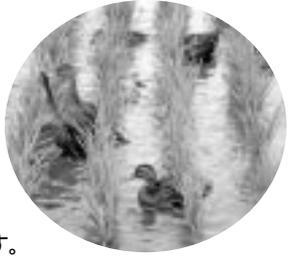
草取り

「上農は草を見ずして草を取る。中農は草を見て草を取る。下農は草を見て草を取らず」という、ことわざがあります。

畑では、確かな経験による観察力があれば、草が出るタイミングがわかるものです。出てきそうな時に土の表面をけずったり、作物の根元に土を寄せてやったりすると、たいした時間も労力も費やすことなく畑はいつもきれいです。それに比べて草を見てからの除草作業だと、手間も時間も比較にならないほどかかります。ましてや除草しないでいると、作物が草に負けてしまうだけでなく、多くの種子を畑に残します。

水田では除草機による作業には肉体的限界があるので、アイガモや紙マルチなどに頼っているのが現状で、当法人では有機米栽培の3割が除草機、残り7割がアイガモ、紙マルチなどによる除草方法です。

とにかく、昔から言われてきました「農業特」に有機農業は雑草との戦いです。これから炎天下の除草作業、機械除草だろうが手取り除草だろうが大変は仕事が続いてきます。 (北)



覚え、良い製品を造り、一日も早くファームの一員として貢献できる力を身に付けることが大事だと思っています。ただ漠然と仕事をこなすだけではなく、自分が造った製品の先にある顔を想像しながら、これからも日々努力していきたいと思

あとがき



風にそよぐ稲、緑冴える山々
残雪をいただいで横たわる今頃の月山
を見ていると思ひ出す光景がある。

一回目の除草機が終わるころ、決まって村の山好き数人で早朝にトラクに乗り込み、月山に筒取りに出かけた。身丈がすっぽりと隠れてしまつ竹藪の中に分け入りボキッ、ボキッと筒を折る。親指ほどの太さの月山筒はこの季節限定の貴重な山菜だ。

年に二度この筒取りはどちらかといえば、女衆の特別な楽しみ、一緒に行つた仲間とはくねぬよう、方向を誤らぬよう「ホー」と声を立てながらにぎやかに進んでゆく。「仕事を終え、さあ帰ろう」という時、ずしりとその日の収穫を背負い、必ず越えなければならぬ崖があった。「むな崖」と呼ばれたその崖は名前通り登るときに胸が崖につく程に急な難所だ。日常と程遠い雪深をいただいたその光景と、「むな崖」をよじ登つた経験は30年以上経つた今もほろりとした記憶となつて鮮やかによみがえる。

村をあげての山菜取りもいつしか廃れ、思ひ出すことも少なくなつたが新聞紙に包んで届けられた隣人からの思いがけないお裾分けの筒に舌鼓を打ちながら遠い日の話に花が咲いた。

(東)